

草のみどり

Kusa no Midori



特集

2023年度秋卒業式

FRONT LINE 理工学部

就活×理工学部×研究

国際経営学部

留学の一步が未来を輝かせる

留学の一步が 未来を輝かせる



国際経営学部では設置科目の7割以上を外国語（主に英語）で実施しており、外国人教員や留学生の多さが学部の特徴となっています。

加えて、入学後に海外への交換（長期）留学に参加する学生も多く、グローバルな社会で活躍する素養を満たすべく、多くの学生が積極的に留学へチャレンジしています。

留学は、経済・社会のグローバル化に伴い求められる外国語運用能力の向上をはじめ、異なる文化や習慣に柔軟に対応できる能力を備えることを可能とする大変貴重な機会です。

本特集では、海外留学に挑戦した2人の交換留学生と、1人の“日本”という外国で学ぶ韓国人留学生の留学体験を紹介し、留学が個人的な成長や将来のビジョン形成にどのように寄与したかを取り上げます。最後に事務室の外国人職員も留学経験について語ります。



人間的な成長を実感し、 将来の目標を明確にした 交換留学の価値

私は2年次の夏より、イギリスのマンチェスター大学（以下UoM）に1年間留学しました。マンチェスターは国際色が強く、音楽やサッカーなど文化的に栄えた大都市です。UoMを代表に学生も多く、さまざまな文化を持った友人たちとの関わりを通して、イギリス生活の魅力にあふれた楽しい日々を送ることができました。

生涯の思い出を作ることができましたが、イギリス留学を通して一番価値

を感じることは、私の人間性の成長と将来の道筋を決められたことです。初めての海外での一人暮らしでは自主性と管理能力を培い、大学生活を通して行動力、積極性を身につけました。さらに、文化的人種的に多様な環境で過ごすことで多文化共生への興味を深め、社会学を学ぶことで今後の国際社会における自分の将来のビジョンを明確にすることができました。

海外に長期滞在をするのは、今回の留

国際経営学部
国際経営学科3年

むくるまこ
六車 眞子



念願バリのクリスマス（六車）



マンチェスター大学に入門（六車）

学が2回目でした。過去にドイツで4年間を過ごした経験から国際教育に興味を持ち、将来的に実践的な学びをしたいという気持ちから中央大学国際経営学部に入学しました。イギリス留学を志望したのは、帰国後の6年間の集大成として海外生活に再挑戦したい、さらには教育社会学の学びを経営学と融合させて将来に活かしたいという目標のためでした。

自主性と積極性の大切さを学ぶ

寮生活では、一人の時間と自分でしなければいけないことの多さに初めは苦労しました。しかし、やることリストの作成や時間管理表などの基礎から始め、習慣化させることで乗り越えました。自主的にさまざまなイベントや挑戦できることに積極的に参加することで、初めは有り余っていた時間も貴重な経験に変えることができました。

UOMの授業で一番印象的だったのは、すべての授業ごとに毎週1時間設けられた少人数制のセミナーでした。その週のテーマについて担当教員と学生たちが議論をするもので、教授の講義の内容に加えて事前のリーディング課題を踏まえて行うため、自分にとって一番の難関でした。しかし、どんな意見も経験も尊重されること、学生たちが真剣に自分の興味関心に打ち込み議論する姿に感銘を受け、質問や意見の交換に積極的に参加できました。

留学を通して得た強みと力を糧に、目標に向けて努力していきたい

UOMでは社会学、人類社会学や教育社会学の授業を専攻しました。主要な理論や学者に加えて、現代問題の深刻さをデータとともに学び、自分たちで新たな視点や考えを発展させていくような授業ばかりで、毎週の講義が刺激になりました。イギリスは移民国家として名高いですが、同時に根強い格差社会を抱え、人種的、性別的な差別も改善が訴えられている状況です。UOMで社会学を学べたことは、国際社会における先進的な研究を知り、その現状を体感できるということでも貴重な経験となりました。

帰国後の現在は、教育社会学で学んだ移民の進学問題を中心に、日本国内での多文化共生へと貢献したいと考えています。留学を通して得た強みと力を糧に、今後自分の目標に向けて努力していきたいと思っています。

自身の成長と

将来のビジョン形成に役立った国際経営学部の学び

国際経営学部での経験は私の成長と将来のビジョンの形成に大きな影響をもたらしました。

まず、国際経営学部の多様な経験に触れられる教育体制を通して、柔軟で創造的な思考を身につけることができました。

授業はスタンダードな講義形式だけでなく、ディスカッションやプレゼンテーションなどのアクティブな学修を積極的に行っています。将来のビジネス環境を想定した、さまざまな状況下で迅速に対処する力を学び、革新的なアイデアを提案する能力を養うことができました。たとえば、私はJFAや学研などの組織と

国際経営学部
国際経営学科3年

マ ジュン ヨン
Ma Jun Young

提携した授業に参加し、彼らが直面している課題をコンサルティングするプロジェクトを行いました。これらの実践的な活動は能力を培うのに大いに役立ちました。

文化の違いとコミュニケーションの重要性を認識

国際経営学部の異なる国籍の学生と共に学び、ディスカッションを通じて意見を共有する環境では、文化の違いとコミュニケーションの重要性を認識することができました。現代の世界はグローバルゼーションを追求しており、この経験は重要なものであったと感じます。これにより、将来グローバル化するビジネス環境において異なる文化や価値観を尊重し、協力する能力を身につけることができました。

国際経営学部は学生の自主性、積極性を尊重しており、アイデアを発揮する柔軟な環境が整えられています。学生主体の団体の設立など、自分たちがやりたいプロジェクトを創造・提案し、実現まで



行うことができます。私はGACEという留学生を支援する学生団体で、UC DAVISというアメリカの大学と交流するイベントを企画し、学生たちに多文化を経験できる機会を提供しました。

新しいアイデアや視点を柔軟に受け入れる方法を学ぶ最適な環境

私の将来のビジョンは、これらの経験と価値観がもたせています。私がグローバルビジネスにおいて重視するのは、文化理解とチームワークを活かし、革新的なソリューションを提供、持続可

能な経営を実現することです。さらに、個人の成功だけでなく、知識とスキルを共有し、周囲の仲間と共に成長するリーダーとしての役割を担うことができる人材となることをめざしています。日本の国際経営学部での生活は、さまざまな文化と慣習を経験しながら、自分の能力を向上させ、新しいアイデアや視点を柔軟に受け入れる方法を学ぶ最適な環境でした。これらの貴重な経験をもとに将来の課題に向けて自信を持って活動し、目標を実現するために熱意を持って努力を続けます。

環境の変化が自分を変える

国際経営学部
国際経営学科3年
たけうちりょう
竹内 遼

留学したいと思ったのは、しないと後悔すると思ったからです。留学は学生が果敢に挑戦でき、学生時代を彩る濃い思い出になります。私はサークルにも所属しておらず、校内活動も課外活動も誇れるものがなく、どこか寂しいな、物足りないなと感じていました。「何か自分で頑張れることが欲しい」「環境を変えたい」そんな私に留学はぴったりでした。私は交換留学枠を必ずもらおうという強い意気込みで挑戦しました。

普段と異なる環境で人との関わり方を再確認し、考え方をリセット

私が選んだアメリカという国は、留学先としてはとても有名です。多種多様なバックグラウンドを持った人々が集まることで知られるアメリカですが、私が通った大学は全学生が約3000人の小規模な学校です。いわゆる都会ではなく、山の近くのキャンパスで自然に囲まれ多

くの学生同士が顔見知りという環境でした。普段東京で過ごす私にとってこの変化は挑戦的で、なかなか慣れませんでした。しかし、次第に少人数授業の丁寧さ、深く人と関われる環境に魅了されました。アメリカで学んだのは環境で人の生き方は変わる、ということでした。人は頻りに環境を変えるものではありません。私もアメリカに留学するまでは東京に十数年間住んでいましたが、自身の人との関わり方を再確認し、考え方をリセットすることができました。

自分のめざす環境を見定め、一直線で動きたい

留学中は誰も自分を知らない環境下で、自分の在り方を見つめ直すことができました。過去に囚われず、なりたいた自分を追求できます。価値観を再形成する貴重な体験だったと思います。普段しゃべらない言語を使い、スーパーにも地図

を凝視しながら行かなければならないような慣れない土地で経験する苦楽は、私に大きな影響を与えました。たとえば、日本にいた頃は周りの目を気にすることが多く、一人でいることを恥ずかしく思う瞬間がありました。しかし、留学先では当たり前のように一人で過ごします。友達が増える一方で、一人で過ごす時間を素敵だと感じることもありました。一人の時間を自分のために有意義に使う練習にもなったと思います。

今後このような経験はできるのだろうか、と考える時があります。大学で得たチャンスを活かすことはうれしいですが、次のチャンスは自分で作らなければなりません。みずから自分のめざす環境を見定め、それに向かって一直線に進みたいのです。勇気が必要かもしれませんが、アメリカ留学で学んだ「環境の変化は自分を変化させる」という強い経験が私を後押ししてくれると思います。



ニューヨークのブロードウェイ(竹内)



アッシュビルの旅行(竹内)

日本で留学生として過ごした経験を、 学生支援に還元する

国際経営学部事務室
ブタイウォ
Butajlo
アグニエシュカ
Agnieszka

文化を構成する 複雑な要素に気づく

2023年4月から学校法人中央大学に入職し、7月から国際経営学部事務室へ配属されましたアガ(ブタイウォアグニエシュカ)と申します。主に、留学支援や広報の業務を担当しています。私はポーランド出身で、2021年に日本の大学院へ入学しました。日本での留学生としての経験は、私の人生の視点を豊かにし、多様性への理解を広げる素晴らしい機会となりました。今回の記事では、私が留学生として培ってきた経験を、業務を通して学生に皆さまでに還元していくことができるかをお伝えするとともに、将来、海外で働くことを希望されている方に自分の経験をお話しすることで、少しでもお役に立ていただければと思っています。

日本での留学生生活では、言語、習慣、社会における違いに直面しました。当初はなじみのないことが多く、適応するのが難しかったものの、時間とともにこれらの側面における多様性の本質について学び、自分自身の成長につなげることができました。日本の学生と交流する中で、文化を構成する複雑な要素にも気づき、これまでの常識や考え方を調整する必要があると感じました。

具体的には、世界中からの留学生と出会った際、さまざまな日本語のレベルの人々に対し、自分の日本語の言語レベル

を適切に調整することの難しさや大切さに気付きました。こういった経験を通して「やさしい日本語」、つまり、子どもや外国人、高齢者など、言語の理解が難しい人々にも理解しやすいように工夫するという研究を大学院で進めるに至り、言語調整の意識を高めることができたと思います。また、自分と異なるバックグラウンドの人と話す時に、共通理解のために言葉選びや表現に注意するだけでなく、「お互い様」の気持ちを持つことも大事だと思いうようになりました。

学生の多様性を受け入れ、 日本の学生と留学生の 成長を支援したい

こういった経験は、現在の大学職員としての仕事に大いに活かすことができると感じています。私は大学職員として、学生の多様性を受け入れ、日本の学生と留学生の成長を支援していきたいです。言葉の壁や他の留学生が抱えている悩みに対して、適切なアドバイスができる職員になりたいという目標を持っていました。私も同じような道を歩んできたので、自分の経験を活かして学生に寄り添えると考えています。また、大学では学生や教員に加えて、さまざまなステークホルダーと適切なコミュニケーションを取っていくことが必要不可欠です。これからも自分の言葉に注意し、積極的にコミュニケーションを取って相手が求めていることに応えられるよう頑張っていきたい

と思っています。

日本での留学生としての経験は、私の認識や考え方を変えるきっかけとなりました。留学しなかったら経験できなかったことは本当にたくさんあります。多様性に触れ、新しい価値観に直面し、知らない世界に飛び込むことは誰にとっても大きな挑戦です。留学生としての私の経験は、個人の成長と仕事への取り組みの両方に影響を与えています。これらの仕事においても周りの多様性を受け入れ、中央大学の学生を支援する視点を持ち、ほかの教職員のサポートを受けながら日々努力して学生の成長を応援したいです。

これらの留学経験者は、異なる文化の中で学び、成長し、新たな視点を獲得するきっかけとなる経験をしてきました。留学は、個人的な挑戦や自己啓発の場になるだけでなく、将来のキャリアやビジョンにも大きな影響を与えることがあります。多様性を尊重し、新しい文化を受け入れる力、そして適切なコミュニケーション能力は、国際的な視点が求められる社会で不可欠なスキルです。

これらの記事を通じて国際経営学部の学生や職員の生の声を聞いた読者の皆さんは、留学の重要性を再確認されたかと思います。留学は、私たちが世界をより良く理解し、より豊かな未来を築く一助となります。国際経営学部は、これからも学びの場として、学生に有意義な留学のチャンスを与えられる環境を作っていきます。



留学生友達とイルミネーション鑑賞 (Agnieszka)



小学生との異文化交流プログラム (Agnieszka)

SAINA
SHOTA

FACULTY OF GLOBAL MANAGEMENT

世界を人に動かす Vol. 22

企業経営とグローバル経済の先端知識、優れたコミュニケーション能力を養うべく、国際経営学部生は前進を続けています。

「唯一無二」「利他の精神」の学生生活から学んだ

世界を夢見て国際経営学部を志望

「世界を股にかける仕事がしたい」、当時所属高校3年だった私は漠然とした気持ちで授業のほとんどが英語で行われる国際経営学部へ進学。今振り返ると決して順風満帆ではない大学生生活だったが、良い環境、素晴らしい仲間恵まれ、幸運にも希望する総合商社の内定を勝ち取ることができた。ここでは、私の学生時代の経験がどのように就職活動に役立ったのかをお伝えしたい。

理想と現実とのギャップ

華やかなキャンパスライフを夢見ていた。しかし、2020年4月、新型コロナウイルスの影響で入学式が中止となり、行動制限を強いられる新生活が始まった。授業がすべてリモートとなり、教授もクラス仲間ともパソコン画面を通じての接触しかできない。授業開始5分前に起きるとは、時が過ぎるのをただ待つ。いつの間にか夜になり、友達とゲームをしていたら朝日が昇ってくる。傷心のまま、非日

常の生活は気付いたら半年が過ぎていた。

暗闇から抜け出すための挑戦

そんなある日、「サッカー部の選考会が行われるらしい」との噂を耳にする。正直、選考会はないものと諦めていたが、暗闇に一縷の光が射したように希望が湧いた。小中高で熱中したサッカーを大学でも続けたい。その思いを胸に鈍った体に鞭打ち、必死に練習して年末年始の選考会に挑み狭き門を突破できた。サッカー部への入部は1年遅れての大学2年次の4月。仲間は全国の強豪校から集まった猛者ばかりで、入部当初は劣等感や不安で一杯だった。練習では足を引っ張り、苦しくて辞めなくなる時もあったが、暗闇に戻りたくはなかった。途中入部だからこそ、何かしらチームに貢献したいという思いで続けてきた。公式戦出場という個人目標は未達成ながら、素晴らしい仲間と共に、最後まで切磋琢磨したい。

大学時代の活動と手に入れたもの

コロナ禍で行動が制限される中、心の

よりどころが部活動だった。生涯付き合える仲間と巡り会えたことは私にとって最大の財産になった。

大学3年次に対面授業が再開。国際経営学部は、異なるバックグラウンドを持った教授や学生が多く、会話や意見交換を通じて言語や文化を吸収する有意義な時間を体験できた。現在、ゼミでは咲川孝教授にご指導いただき、卒業論文に取り組んでいる。教授から学んだ印象に残る言葉は、「インターネット上の情報だけに頼るのではなく、本や新聞を読むことや実際に現場で働かれている方々に話を聞くことでよりリアルで正確な情報を掴むことができる」。安易な方法ではなく、足を使い五感で感じる重要性を説いてくださったこの言葉は、私の就職活動でも大いに活かされることになる。

学外では、2つの活動を行ってきた。一つは、附属4校の高校生に各学部の魅力を伝える「附属生ウェルカムイベント活動」。私は、国際経営学部の担当として、千人もの高校生を相手に直接スピーチで魅力を伝え、進路を考える機会を提供す

私立中央大学附属横浜高等学校（神奈川県）出身
国際経営学部国際経営学科4年
齊名 翔太



1 憧れたサッカー部での試合



2 附属生ウェルカムイベントでのスピーチ



3 インターン先で知り合った就活仲間

この活動に大きなやりがいを感じた。もう一つは、大学1年次からコーチとして活動した、母校附属中学での「サッカー部指導活動」。やんちゃな中学生に対して、論理と情熱とユーモアをどのように織り交ぜれば信頼関係を築けるかを試行錯誤しながら実践。実際に背中を示しながら、親睦と絆を深めた。

地道な行動が実を結んだ就職活動

就職活動を始めたのは大学2年次の2月。キャリアアセンターからメールが届き、初めて参加したのが総合商社の説明会だった。何について話しているのかさっぱりわからなかった。以降、危機感があったものの、授業や部活が多忙で就職活動をおろそかにしていた。夏のインターンでは、エントリーしたすべての企業が全滅、悔しい思いをした。夏の惨敗を取り戻すため、秋には対面で行われる説明会や1dayインターンシップに積極的に参加。優秀な学生のノウハウやスキルの吸収にも力を注いだ。加えてOB訪問を何度も重ね、本選考に備えた。こうした地道な行動が実を結び、晴れて希望する総合商社から内定を頂くことができた。しかし振り返ると、多くの失敗を経験した。失敗から目を背けず、謙虚な心を持ち、試行錯誤を繰り返すことが大切だと学んだ。

国際経営学部だより

エビデンスに基づく意思決定

よく学生に、「将来、勉強して機械による自動化や人工知能に取って代わられにくい仕事に就きたい」と言われる。しかし、特に規則的で創造性のない仕事であれば、どんなものでも置き換えられるようだ。タスクの問題解決方法が、観察されたデータから変数間の相関関係に基づいて、過去の経験から普通に推測されたり模倣されたりするものであれば、機械は仕事やタスクを学習して置き換えることができる。

医師の仕事と同様に、原因を知ることが正しい判断をするために重要である。しかし機械は、観測データから原因と結果を区別することに行き詰ってしまう。そして、機械が学習しよう因果推論のための科学はまだ進行中である。人間は先んじていることができるのだ。

ゼミでは、学生は量的推論と分析のスキルを身につけるために勉強する。これらは因果推論の基礎となるものだ。このスキルはあらゆる分野に応用でき、ビジネス上の問題解決や意思決定に役立つ。学生は学部プログラム内で特定の分野

を追求することができる。学生はまた、企業の成長、企業の生産性と発展、グローバル競争、労働力の供給、人的資本と企業への投資、政治的つながりと企業のパフォーマンス、経済政策に対する企業の反応、場所に基づく政策と企業の成功、産業政策など（これらに限定されないが）現代の経済問題を研究する。

機械は将来どんな言語でも理解できるように助けてくれるだろうが、学生には英語で論文を書き、マイクロデータを使うことを望む。研究や学問の進歩は英語で書かれる。原点から直接学ぶことが大切だ。書くことは思考法であり、議論を研ぎ澄ますのに役立つ。全方位的な主張がほとんど正しいように見えるが、データから具体的な証拠を得たものが勝者となる。

学ぶことは簡単ではないが、楽しいことでもある。

ヴァンティエン
国際経営学部准教授 VU, Manh Tien

最後に

私はこの大学で、刺激を受ける多くの人たちと出会い、積極的に行動して吸収することを学んだ。自分を成長させ、素晴らしい環境を与えてくれた大学に感謝したい。内定した企業のメンターから還

元された「利他の精神」という言葉。チームのため、仲間のため、後輩のため、まさに大学生活で身につけたスキルが凝縮された言葉だと感じた。多くの方々の支えがあり今の私がいる。感謝の思いを忘れず、自己研鑽を続け、世界で活躍できる人材になれるよう邁進したい。